

やきもの屋のかげ茶碗

私の毎日使っているご飯茶碗と味噌汁碗は、私の窯で焼いた磁器の碗を使っている。しかも、色絵のつかない、三級品の捨てる寸前の茶碗である。やきもの屋の子供としてそのような環境で育ち、青年期になっても他の人とそのような話をすることもなく、味噌汁碗を木の椀で使う、ということを知らなかった。ある時、東京の先生方と食事の機会があって、「君の家は江戸時代から色絵磁器の専門の窯だから、朝晩の食器はきれいな金襴のついた色絵磁器を使っているのでしょうか」と言われたことがある。私は、「皆様はそうお思いでしょうが、紺屋の白袴で色のついたやきものは売りものなので、色のつかない三級品を毎日の食卓に使っておりました。しかも味噌汁碗も磁器の碗です」と答えたら、皆さんびっくりされていた。

私たちの周りはやきものばかりで、木の椀を買うよりやきものが安く、また家が窯元なのでやきものを使うのが当たり前ということなのである。私にしてもこのことがなかったら、今でも味噌汁碗は磁器が当たり前と思い込んでいたことと思う。

紺屋の白袴と同じ意味で、やきもの屋のかげ茶碗という言葉が有田にはある。色絵のついたものや染付ものでも、一級品やちょっと悪いものは売りものになるが、三級品やもっと悪い「かげ」たものは売りものにはならない。そうした捨てる寸前のやきものが、窯元の家では普段使いとして使われている。

今日では、さすがに色絵のついた二級品を使っているが、売れるものは自分たちの使いにはもったいない、という気持ちは今もって変わらない。そうしたやきもの屋のかげ茶碗の気持ちは、なかなか抜けきれるものではなく、今でも、倉庫に放ってある縁の「かげ」たものも、使えそうなものは拾って食卓を飾っている。

「作家は自分の美意識を高めるためにも、良いものを毎日使わなければ駄目だ」と言う人もいるが、なかなかできるものではない。「紺屋の白袴」は、やきもの屋には「やきもの屋のかげ茶碗」として、次の世代にも伝わっていくものだと思っている。

(日銀『生活の設計』No.6 昭和六十年四月)